Akita University

秋　田　大　学
教養基礎教育研究年報
3 — 8　(2003)

英語関連科目の改善へ向けて
— 改組後の実践報告 —

佐々木　和　貴

1. はじめに

本学では平成10年度の学部改組に伴い，外国語教育関連科目も大幅な手直しを行った。本稿ではそのなかでも特に大幅な変更を行い，その後も継続して手直しを行っている英語教育関連科目の実践を報告することで，本学語学教育の今後のさらなる改善へむけての基礎資料としたい。

2. 英語教育の実践

2-1 変更までの経緯

さて本学の外国語教育はさまざまな外国語の実践力を確実に養成することを目的として，改組を機に教養基礎教育の中に『国際言語科目』として設定されることになった。これは国際化，グローバリゼーションの進む中，学内外からの要請を受けて，従来の『外国語科目』すなわち教養主義的な色彩を残すこれまでの語学教育から，実践的な語学教育へと大きな方向転換を図ったものである。

以下に述べる英語教育の場合も，上記のような要請を受けて，大幅な変更が行われた。改組以前は，各教官に授業の方針設定がすべて委ねられていたため，個々のクラスによって，たとえば聴解中心の授業もあれば，読解のみのクラスもあり，作文専一のクラスも混在するという状況にあった。(現在でも，かなりの数の高等教育機関のいわゆる「一般英語」の授業では，まだこうしたシステムが維持されていると聞く。) これは一方においては，教官の得意な領域での指導を可能にするフレキシビリティを備えたシステムとも言えるが，他方，余りにも随意的であり，このシステムでは時代の要請するような系統立てた形での学生の実践的英語力育成が困難なことは，これまでも指摘されてきたところであった。そこで本学では，改組を機にこうした難点を解消し，同時にこれまでのシステムの長所であったフレキシビリティも多少は残すような新しいシステムの構築が，関連教官を中心にした作業委員会で検討されることとなった。

2-2 新システム

議論を経て立ち上げられた新しいシステムでは，一年次に「リスニング」「ライティング」の二本の柱が英語教育の基本として設定され，両者とも，共通の教科書・共通のテスト・共通の方法論で実施されることになった。したがって本学の英語教育では，学生は一年次では『英語』という区分の中から，指定クラス（50名規模）で，半期ずつ「英語リスニング」(週２回・２単位）と「英語ライティング」(週２回・２単位）を受講することになった。また２年次以上では，さらなる運用能力を養うため，選択科目として『外国語活用演習』という区分の中から，「主題別英語リーディング」(週２回・２単位）か「英語会話表現法」(週２回・２単位)，あるいはその他の週１回・１単位の英語関連科目（たとえば「英語新聞速読」「英語ニュースを聞く」「短期英語リーディング」など）を受講するという大枠が設定されたのである。以下，この新しいシステムについて，順に詳しく見ていきたい。

2-3『英語』

「英語リスニング」

英語リスニングは，一年次に，週二回半期の全学向け科目として設定された。特徴としては，事前に担当教官が打ち合わせて共通の方法論を定め，共通教材を使い，共通テストを行っていることがあげられるだろう。これによって，従来の随意性がかなりの程度解消され，視点と目的さらには評

Akita University

価基準が統一され，系統立てた英語教育を目指すという方向性が明確になった。またとりわけ音声中心の学修を一年次で徹底して行うことで，語学力の基礎固めを目指すという方向性は，全国的に見てもかなり斬新なものであり，時代の要請に即した，これまでにない実践的な特徴といえるだろう。さらに教材も，映画やヴィデオなどを積極的に取り入れて，視覚から導入することで，聴解の授業の難点である単調さを和らげ，学生の興味を持続させるように工夫している。（なお教材については，市販のものも，そのままではなく，英語担当教官がより使いやすい形に加工したり，独自のプリントを作成したりして使用している。）

以下に，これまで5年間の実践を通じて改良を重ねてきた結果として，現在「英語リスニング」がどのような形態で行われているかを示すため，平成15年度の最新のシラバスの大筋を例示しておく。（なお医学部医学科は，別教材で実施している。）

・授業科目名：英語リスニングA～E／H～R
・開設学期等：1期
　単位・時間数：2単位・60時間
・授業の形式：演習
・授業の目的及び到達目標：
　1．目的
　　映像と音声を活用して，聴解力を中心とする英語の総合的コミュニケーション能力の伸長を図る。
　2．到達目標
　　1）自然なスピードで話される英語の音声に慣れる。
　　2）英語のインタヴューの要点をつかむ。
　　3）様々な職種で活躍している人たちの生きた英語を通じて，社会の多様性に興味を持つ。
・カリキュラム上の位置付け：
　英語の4技能の総合的養成の一環として，他の1年次必修科目「ライティング」，および2年次以上対象の英語関連科目と相互に関係している。
・授業の概要と進行予定及び進め方：
　英語リスニングA～EとH～Rの各クラスともすべて共通のテキストを使用する。

テキストは，アメリカ合衆国カリフォルニア州で生活する様々な職業と背景を持つ人々に現地でインタヴューを行ない，実社会で使われている生の英語を集めたビデオ教材である。

テキストはいくつかのUnitによって構成されており，各Unitは基本的に2回の授業を使って進める。

各Unitの授業の進め方は，基本的に以下の通りである。

1）インタヴューを本格的に聞く準備として，簡単な英語の質問に答える。
2）インタヴューを見て，その概要を理解する。
3）再びインタヴューを見て，その詳細を理解するための作業を行なう。
4）字幕付きのインタヴューを見て内容が正確に聞き取れていたか確認する。
5）インタヴューの要約文を完成させる。

またこの他に各教官が，共通テキスト以外のそのクラス独自の内容を授業に盛り込むこともある。

・成績評価の方法：
　出席と授業での作業状況などの平常点（20%），各クラスに対して行なう2回の共通テスト（40%），各担当教官が独自に行なう個別の評価（40%）を総合して評価する。
・教科書・参考書等：
　大八木廣人／若有保彦
　『California Dreaming: Focus on Lifestyles ――生きた英語を学ぶビデオ総合演習』（マクミラン・ランゲージハウス）（英和辞書を必ず持参すること。）

「英語ライティング」

英語ライティングも，一年次に，週二回半期の全学向け科目として設定された。つまり本学の場合，学生は前期リスニングを受講したあと，引き続き後期にライティングという形で英語関連科目を受講することになる。高校までの英語教育の中心である「リーディング」をあえて2年次以上に廻し，1年次では主として「リスニング」と「ライティング」に絞ったこのシステムは，実践的英語力の養成という本学英語教育の狙いに即応したものといえるだろう。なお，この科目の主たる特徴としては，こちらも教官同士で方法論を統一し，

Akita University

共通教材を使い，共通テストを行っていることがあげられる。リスニング同様に，視点と目的，さらには評価基準が統一されているわけである。また教材も，試行錯誤の結果，昨年度から単なる和文英訳ではなく，パラグラフ構成を主眼に据え自由英作文を大幅に取り入れた教科書を導入した。これまでの英作文の授業の難点であった硬直性を解消し，Eメイルなどによって海外との英語でのやり取りが飛躍的に増える時代に「使える」作文力の養成を目指しての工夫である。さらに学生に毎回 Homework を課し，それを英語教官が添削することにより，講義時間内では物理的にとうてい不可能な実践的な力の育成に努めている。

以下に，これまで5年間の実践を通じて改良を重ねてきた結果として，現在「英語ライティング」がどのような形態で行われているかを示すため，こちらも平成15年度の最新のシラバスの大筋を例示しておく。(なお医学部医学科は，やはり別教材で実施している。)

・授業科目名：英語ライティングA～E／H～R
・開設学期等：2期
　単位・時間数：2単位・60時間
・授業の形式：演習
・授業の目的および到達目標：
　1．目的
　　中学，高校までの復習ではなく，大学専門教育で必要とされる基礎能力の養成に重点をおく。言語能力はすべての学術研究の基礎である。英語を通して学術上の言語使用法を習得する。同時に英語に対する心理的抵抗をなくすことも目的とする。
　2．到達目標
　　学期終了時までに受講生は次の技能を身につける。
　　1. 日本語を書いてそれを翻訳するのではなく最初から英語で文章が書ける。
　　2. 短文だけではなく，複雑な構造をもった文が書ける（関係代名詞，接続詞などを使って)。
　　3. パラグラフは主題文（Topic sentence）と補強文（supporting details）から成り立っていることを理解する。
　　4. 主題文と補強文からなりたつパラグラフが書ける。
　　5. 論文は序論をなすパラグラフ，本体をなすパラグラフ，結論付けるパラグラフから成り立つことを理解する。
　　6. 上5に記載した3つの構成要素から成り立つ，簡単な英語を使った論文が書ける。
・カリキュラム上の位置付け：
　英語のライティング基礎能力のほか，上述したように広く学術能力養成も目的としているので，今後大学で学びつづける基盤として位置付けられる。
・授業の概要と進行予定及び進め方：
　上述の目的，目標を達成するため以下の内容で授業を進める。
[練習の内容]
　1．文法的正確さにとらわれず，短時間内にできるだけ多くの量を書く。
　2．単純な文を与え，それを積み重ねて，徐々に複雑な文を書く。
　3．複雑な文を組み合わせ，それをパラグラフにする。
　4．与えられた図や描画を説明する短文を作成し，複文にしてパラグラフにまとめる。
・成績評価の方法：
　出席（attendance）＆授業への参加（class participation）20%
　宿題（home-work assignment)，クラスで行う小テスト（in-class test）40%
　定期試験2回（course-wide exam）20%＋20%
・教科書・参考書等
　Curtis Kelly & Ian Shortreed. (2001). Significant Scribbles. Hong Kong: Longman.
　English-Japanese & Japanese-English dictionaries

2-4『外国語活用演習』

以下の科目は，原則として2年次以上で履修する英語関連の選択科目である。(医学部向け「英語会話表現法」のみは，カリキュラムの都合上，一年次後半で履修することになる。)

「主題別英語リーディング」

この科目は，一年次で「リスニング」「ライティ

Akita University

ング」を受講した学生が2年次でも英語関連科目を履修する場合に，その大半が受講する『外国語活用演習』の軸をなす科目である。（なお受講生は，殆どが工学資源学部学生である。これは工学資源学部の語学関連の必要単位が「一つの外国語6単位以上」と設定されているためで，医学部は一年次で語学関係の単位取得が完了するカリキュラムとなっており，教育文化学部の場合も，大半の学生は1年次で語学関係の単位取得が完了するか，あるいは2年次で必ずしも英語関連科目をとる必要がないカリキュラムとなっている。）なおこの科目は，「リスニング」「ライティング」とは異なり，選択科目という性質上，教科書の選択は各教官に任されている。それぞれの得意なトピックで，これまで貯えてきたノウハウを生かしながら，学生の読解力の養成を目指すという点では，以前のシステムの利点であったある種のフレキシビリティを，新しいシステムにも取り入れた形式といえるだろう。ただし，教科書選択に際してはこれまでの教養主義的な選択はやめること，授業運営に際しては学生の読解力を向上させるための基礎的，かつ実践的方向性を目指すことという2点では教官の間で合意が形成されている。つまり，共通の教科書こそ導入していないにせよ，この科目も改組後の方向性に基づき，ある程度共通の方法論で運営されているといえるだろう。

「主題別英語リーディング」は，前述の通り基本的に選択科目なので，平成10年度から13年度までは，A～Jまでの異なる教材／テーマを提示する10クラスのなかから，学生が自由に受講を選択する形式を採用してきた。しかしこれではクラスサイズに極端な偏りが生じてしまうという欠陥が，この4年間の実践を通じて明らかになってきたのである。たとえば，平成13年度などは，最大140名，最小4名の隔たりが出てしまった。人気の教師，あるいは単位を取得しやすい授業に学生が集中するのは，こうした形式ではある程度やむを得ないことだが，ここまで極端になると，演習科目としての適正な授業運営が殆ど不可能になってしまう。そこで平成14年度は，担当教官で協議の上，受講生の大半が所属する工学資源学部については，この科目も，「リスニング」「ライティング」と同じ50名規模の指定クラスで行うという形に変更することになった。変更に際しては特に混乱もなく，今のところ受講生からも不満の声は聞こえてきていないが，評価については，平成14年度の授業アンケートの集計結果を待ちたい。またこの形式では，授業運営は円滑になるものの，それと引き替えに学生の選択の余地が狭められるという難点があるため，今後，どのような形態が望ましいかをさらに検討していく予定である。なお，平成14年度には，あとで詳述するように，学生の多様なニーズに応えるような新しい英語関連科目を設けて，学生の選択の幅を広げるような対応も同時に行っていることを付記しておきたい。

「英語会話表現法」

「英語会話表現法」は，「主題別リーディング」とならぶ『外国語活用法演習』の柱であり，時間帯も重複しないように設定してある。したがって，学生は「主題別リーディング」ではなく，こちらをとることで必要単位を充足させることも可能である。また意欲のある学生は，両者を同時に受講し，集中的に総合的な英語力を伸長させることも可能になっている。すべてネイティブの教官が担当するこの科目は，全部で6クラスが学部別に開設されている。受講生数は，工学資源学部向けの3つのクラスが近年やや少な目で，10人以下の場合もあることは残念だが，ただ会話のクラスの場合，あまり受講生が多いと効果が半減するし，少人数でも意欲のある学生の会話力を鍛えるというこの科目の趣旨からすれば，受講生数を必ずしも重大視する必要はないのかもしれない。また，教育文化学部向け2クラスと医学部向け1クラスについては，受講生は毎年おおよそ30人前後で推移しており，会話のクラスとしては適正サイズといえる。

「その他の英語関連科目」

これまで述べてきた科目が，週2回・2単位であるのに対し，これを補助し，さらなる英語運用能力の伸張を目指して，週1回・1単位の科目も，いくつか開設されている。たとえば平成14年度に開講されているのは，時事英語の読解を目指す「英語新聞速読I」「英語新聞速読Ⅱ」，リスニング力をさらに鍛える「英語ニュースを聞くⅡ」，速読・多読による読解力の向上を目指す「短期英語リーディングⅠ」「短期英語リーディングⅢ」な

Akita University

どである。これらの科目は2単位科目である1年次の「リスニング」「ライティング」，2年次の「リーディング」「会話」という4本の柱を補強し，さらに特定の分野の英語力を強化しようとする意欲のある学生に向け開設されているもので，平成14年度を見てみるとクラス規模は最大で30名程度，最小で6名となっている。なおこれらの一単位科目については，その科目の性質上，毎年すべてを開講しているわけではないので，今後は，受講生数の推移を見ながら，需要の多い分野で多く開設し，受講生が10名を切るような分野は開設数を減らすなど，柔軟に対応していくべきだろう。

2-5 新たな試み

中学校以来の英語学習歴が多様化するにつれて，近年学生のあいだで英語に対するさまざまなニーズが生じている。また受験の多様化，大学の大衆化に応じて，本学でも最近は，ますます多様なレベルの学生が入学してきている。そして，今後こうした傾向がますます加速化することは避けがたいだろう。そこでそれに対応した英語関連科目の新設は以前からの課題となっていたが，平成14年度からは，試みとして，2年次以上のカリキュラムの中に，「英語の資格を取る」(週2回・2単位)と「主題別英語リーディングK」(週2回・2単位）を新設してみた。前者は学生の「多様なニーズ」に応えるべく，主として工学資源学部向けに開設されたもので，英検・トーイック・トーフルなどの英語資格試験取得の手助けをするものである。大学生協が主催するカレッジ・トーイック等に対する学生の良好な反応からして，おそらくこうした資格取得を支援するような科目に対する潜在的な需要はかなり高いものと推定されるが，平成14年度は初年度ということもあり，受講生は10数名だった。今後，広報活動をより盛んに行い，有効利用を図っていきたいと考えている。また後者は学生の「多様なレベル」に対応して，2年次前期修了までに必要な単位数を満たせなかった学生向けに開設したものである。じっくり学んで，基礎的な読解力をしっかり身につけることが趣旨の科目だが，こちらも初年度ということで，宣伝不足のためか，受講生は15名程度であった。こちらも，きちんと広報活動をすることが，肝要だろう。(もっとも，この科目の受講生とは，2年次前期までに必要単位を取得できなかった，つまり大半は「単位を落とした」学生なので，それが増えることが必ずしも望ましいとはいえないかもしれないが・・・。)

3. 今後の展望

以上，改組に伴う英語関連科目の変更とその実践について報告し，さらにその後も，どのような手直しがなされているかについて紹介してきた。最後に今後さらなる改善へ向けて，どのような方向性がありうるのかを指摘して，結語に代えたいと思う。

改組に際し，英語担当教官は，授業を旧来の教養主義的な構成から全面的に切り替え，その後，発信型能力養成を中心とした新たな指導に意欲的に邁進している。さらに計画にそった講義を展開するべく，ライティングおよびリスニングのワーキング・グループを結成して，講義へ向けて入念な準備をしている。また学生の側も，授業を理解中心型から作業・参加型へ切り替えたことによって学習意欲も向上し，出席評価をシラバスに明示したことにより，改組前に比べて，出席率も上がったように思われる。また平成10～12年度の3年間の学生アンケートを見る限りでは，英語関連科目について「満足」「まあ満足」と回答した学生の比率は，90%弱で一定しており，本学英語教育の改組後の新しいシステムは，学生にもかなり高く評価されていると考えて良いだろう。ただアンケートの自由記述欄からも窺われるように，特に英語については，学生のニーズやレベルは加速度的に多様化してきている。そこでこうした状況を鑑み，平成14年度からは，高度な実用英語力を求める学生や，英語力が劣り丁寧な指導が必要な学生に対する新設クラスを設けたことは前述の通りであり，今後はこうしたより細分化した形での対応が，さらに必要となってくるであろう。そしてこうした対応を速やかに行うためには，3学部の学生・教官のニーズを汲み上げるような回路を常に設定しておくこと，たとえば，より簡便な形で結果がすぐ分かる授業アンケートのシステム作り，より気軽により多くの教官が参観できる授業公開の枠組み作りなどを通じて，学生や教官などの意見を吸い上げていくことが，肝要だと思われる。またこうして吸い上げた意見を的確に受け止め反

Akita University

映させるためには，英語の授業運営に携わる教官が，共同歩調をとって意識を改革して必要があるだろう。

ここ当分はシステム自体を全面的に変更するような大きな改革は行う予定がない以上，英語関連科目のさらなる改善は，おそらく，当面こうした絶え間ない自己点検を通しての質の向上という形で達成されていくしかないだろう。そして，それは可能であるばかりでなく，もちろん，今後確実に実践されるべき課題であることはいうまでもない。